

私はラングーンから貨物船に乗ったが、コレラが発生してまたぎやく戻り、一か月ぐらい上陸したのち、シンガポールに寄港して復員した。私は最後まで補充なしの万年初年兵の伍長だった。

ビルマ戦倒れた友は撤退・救援戦闘

長崎県 吉 福 周 一

―撤退するビルマの部隊を救うために、二十年になつてから戦闘に参加したとのことです、狼兵団で悲惨な経験をされたと思うのですが。

私は大正十二年四月生まれですが、昭和十九年三月、教育召集で朝鮮の第四十九師団歩兵第二十三部隊へ入隊したのです。その部隊は編成したばかりで、釜山―下関へいったが新設なので荷物が多く、積み降ろしに大部苦勞しました。軍馬も連れていかねばならぬというので。

八月になって小倉を出発したが、五島沖で船が故障して引き返し、福岡で下船、七、八日位で修理が終わった

ので、八月十五日お盆に博多を出帆、唐津や伊万里に寄港して五島灘を南下したが、魚雷情報があつて港へはいったら鹿児島の人々が錦江湾だといひよった。

沖繩を通過して台湾の高雄、基隆にもちよつと上陸した。その間、潜水艦が出るので陸地スレスレに南下した。高雄では、支那の飛行機が来て、空中戦をした。私は重機関銃隊なので、船の軸先で対空監視をしていた。パーシー海峡通過するあたりが一番危険と聞いていたが、一隻がやられた。

九月十八日にマニラに上陸したが、十九日には米軍レイト島上陸、はしりの大空襲があつた。輸送船等は避難したが全部やられたといつていた。二十八隻とか三十隻とかだから。マニラに一か月ぐらい待機して糧秣受領に行つたりしていた。

十月五日、久しぶりにマニラを出発だが、前の船がやられて装備を持たないので、我々は重機だけを持って船に乗った。各部隊は二つにわけて、一個師団ばかりでなく、中隊も二個小隊ごとにわけるとかして乗船した（一隻がやられても他の一隻が残れば、そのまゝ戦闘出来るよう

に)。これはうちの部隊ばかりでなく、他部隊もそうやって乗船した。出発したが「マニラ丸」はやられて乗った者は全滅してしまった。

十一月三日にシンガポールへ着いた。つぎは汽車の都合で一週間そこにいたが、シンガポールは敵が空襲をやらざとかで、空襲はされていなかった。B 29がときどき偵察にやってきたようだった。

十二月五日、馬來半島を北上する。ロンブラディックというバンコックとシンガポールの合致点までくると、ビルマ方面からの空襲がはげしくなったが、モールメンへ着いて荷をおろした。

「いよいよビルマへはいったわけですね。戦争の様相も緊迫してきたでしょう。とくに十九年の末ともなれば、負け戦のときですからなあ。

河があると船を結び合せて門橋をつくって荷物を運んだ。マルタバンでは汽車にのせたが、空襲がはげしくなった。それから間もなく二十年の正月になって、ラングーンをへてプローム（イラワジ河の近くの鉄道の終点）で汽車をおろる。それから自動車で私の本部のある

ユナンジョーに着いた。

我々の狼兵団（第四九師団）は総予備軍ということ、私の方は南の方から北上して、北からインパール作戦で敗れて南下して来た日本軍を救援する。二度ぐらいは戦闘して敵を押し返して南下を阻止したが、敵の攻撃がゆるかったので助かった。

独立大隊をつくり、イラワジ河を渡った北の方の山中で、戦闘が起きた。三月頃になると、ラングーン奪回の敵の空挺部隊が降下して混戦となった。私が第一線の時は、「後方がヤラレルわい」と思っていた。毎日毎日、敵の輸送機が飛びましたものね。東の菊兵団（第十九師団）、龍兵団（第五十八師団）の方へは戦車も来た。

四月まで押し返したところで、敵の陣地へ切りこみをやりました。十九日までベグーを約一か月確保した間、斬りこみ戦に移ったわけです。その時、戦闘中感じたことだが、こちらの無線と敵の無線がぐつつくと、言葉がこもって全部ませこみに（混線）になる。そこで、大隊本部のところと無線を離しておかぬと連絡がつかんことになるので無線機を離して、そこまで連絡をたてて、か

ろうじて本部と連絡とれたということです。そうして、十九日頃「撤退せよ」という命令の手紙を持って来たということです。

我々は四月十九日撤退を開始した。友軍との無線連絡もなにもつかぬ。あとから話を聞くと、我々の隊は行方不明となっていたと。それでも戦闘をしていたが、インジからの退路はたたれ、一応アキャブ（イラワジの南の方、印度洋の方）でイラワジの向こう岸に渡河して、徒歩で転進する。

我々は重機関銃だから、渡河の時は北岸で援護して渡河をすませてから、五、六人乗りの舟をみつけて、機関銃をのせ最後に撤退した。プローム付近に上陸したのだが、イラワジ渡河のため大きな兵器は捨てた。

しばらく転進して、兵（つわもの）兵団（第五十四師団）と合流して策集団を編成してさらに転進する。どのくらいの日数だったか、山のなかを歩いてどこを通ったかわからないが、夜間行動を続行した。

ペーグ山脈では塩が欠乏して困った。一週間も塩がないと、汗も塩からなくなる。撤退中には患者が続出、

栄養失調やマラリア患者が激増する。重症者は置いていったと聞く。自分一人だけでも歩けないから、だが同町同村の者は置いてもらわず連れて頑張ったという人もあったと聞く。北上する時に置いていった傷病者が、この山中で収容されて撤退したこともあったようだ。

菊兵团（第十八師団）はあとで救出作戦をやった。その当時は雨期で河は激流になる。徒歩で渡れないから竹を切って筏をつくって渡河したが、私たちはまだ機関銃を持っていたので、渡河援護をしつづけた。流されてしまった隊もあったが、七月二十六日渡河した時、五日間ぐらい山から歩いて、友軍との連絡がついた。

マンガレー街道は、銃剣はつけているが、服もポロポロ、なかには麻袋を腰へまいた人や裸足が多い。兵器と食物を持っただけの兵士が、一列での行列で進んでいる。

我々も裸足だったが、街道で、どこかの部隊が東の方を向いて捧げ銃をやっていた。私達は五日ぐらい遅れて終戦を知った。九月一日、もとの警備地区まで帰って来た。九月十日頃、私はマラリアで、菊兵团の第三野戦病

院に入院したが養生も出来ないの、長くないで退院した。

部隊に追及したが、タトンに集結させられていた。そこでオランダ軍の労役を十か月もやらされて、昭和二十一年六月三十日頃だったか、モールメンに集められ、乗船して七月十四日大竹港に到着して復員した。

よくぞ生きて還ったビルマの初年兵

長崎県 荒川 猛

長崎県 増田 秀行

―島原市同郷の荒川さんと増田さんは同年兵で、共にビルマの菊兵团で戦った戦友です、対談というより交互にお話をして頂きたい。

〔荒川〕

私は昭和十八年四月十日、現役兵として大村の西部第四十七部隊に入隊した。家族は両親、祖父母が健在だった。兄は昭和十四年三月十日、大村の陸軍陸院で病死し

ました。当時は、若者はたくさん出征していたから、家でも入営は当然と思っていたでしょう。

三か月間教育を受けて、一期の検閲後の七月二十七日の深夜に、門司を出航しました。

南方の菊部隊への転属で、シンガポールまでは無傷だった。途中、台湾の馬公に二、三日寄港したが、上陸してサイゴンで糧秣受領も乗船したままでした。昭南港（シンガポール）に着いたのは九月ですから約四十日かかった。

南兵舎に一週間休息待機してビルマへ、モールで戦時編成をしました。

〔増田〕

我々は最初から、南方派遣菊八九〇二部隊への転属要員と軍隊手帳に書いてあった。

モールに着いたのが十月頃で、そこに大隊本部があつて編成し、荒川君は第二中隊、私は第六中隊だった。ミートキーナに汽車で来て、雲南に近いところでフーコン作戦に参加、自分達が着いた時には、すでに戦闘は始まっていた。その時はもう敵に押されていた。英軍と中